

仏様のおはなし新シリーズ第68集 その1 「驕慢の心」

四月はお釈迦様ご誕生の月であります。

八日のお誕生日には、灌仏会(かんぶつえ)や花祭りといわれる法要行事が行われています。

お釈迦様が在世の頃に次のようなお話が伝わっております。

インドのある国にチャンバーという人がおりました。この人は大変裕福な家に生まれました。彼は不思議な事に体の前あたりから月のような光を出して輝いていたそうです。そのためにみんなから神通力があると持てはやされ、占い師やまじないをする人などから担がれ、いい気になり得意満面です。そこでチャンバーは力比べをしようと、お釈迦様のところへ行きました。

ところが不思議な事に、お釈迦様の前に立つと輝いていた光が消えてしまいます。チャンバーは「ははあん、さてはお釈迦様は相手の光を消す術を知っているのだな」と考え、その術を盗み出そうという目的で弟子になります。

しかし、お釈迦様の教えを聴くうちに、その光の広大さの前に立った時自分の光が意味をなさないことに気づくのでした。後にお覺りを開かれたと伝わっております。

このお話は自分の特技にうぬぼれて自慢したり、いばつたりする事はやがて自分をダメにしてしまうということを表しています。一つの点で優れたものがあるならば、それを基礎にして自分を高め、成長しようとする努力は大切ですが、一つが優れているからといって他の点も十分だと考えるのは墮落の第一歩であります。

浄土真宗を宗とする私どもは、阿弥陀如来様の願いを聴かせていただくとき自然と頭が下がります。己のもつ力は優れているという思い込みや、驕慢(きょうまん)「おごり高ぶる心」の心は、阿弥陀様の前では全く意味のない事と気づくことであります。

